

令和 7 年度厚労科研(大西班) 個別会議 (緩和的放射線治療、小線源治療、IMRT 提供体制) 議事録

日時：2025 年 12 月 24 日 (木) 14:00 - 15:00

方法：Zoom によるオンライン会議

出席者(順不同、敬称略)：大西 洋、高橋 健夫、生島 仁史、溝脇尚志、大野達也、
(厚生労働省)岸田 勇人、北條 秀博

1. 冒頭挨拶(大西洋先生)

本会議は今年度のまとめおよび、今期の総仕上げに向けた個別会議として開催された。各分担研究者からの進捗状況報告と、今後の作業の進め方について共有し、厚生労働省側からの意見も交えて進めることが確認された。

2. 各自の発表および協議

(1) 小線源治療の提供体制に関する報告(生島仁史先生)

実態調査と集約化の現状：令和 3・4 年度の調査では、全都道府県に施設があり専門医も配置されているが、症例数には施設間で大きなばらつきがあることが判明した。年間症例数が 10 例以下の施設が 20 施設あり、うち 8 施設は 5 例以下であったが、その多くは同一県内に紹介可能な施設があるため、集約化の対象になり得ると分析された。

治療技術の動向と課題：子宮頸癌に対する画像誘導小線源治療(IGBT)の実施率は、2021 年の 37%から 2023 年には約 50%に向上した。しかし、欧州の臨床試験における 60%以上の実施率と比較すると依然として低く、さらなる普及が必要である。また、ハイブリッド照射(腔内照射と組織内照射の併用)の全施設実施を目指している。

教育・支援策：学会主導のハンズオンセミナー等の教育支援により、参加者の技術向上や不安軽減といった成果が得られている。来月には、まだ実施していない施設を対象としたセミナーを予定しており、実施率 100%を目指している。

議論：海外では小線源治療を行う医師を「インターベンショナル・ラディエーション・オンコロジスト」と呼ぶ動きがあり、IVR との連携やモデルケースとしての周知が検討された。

(2) 緩和的放射線治療の普及に関する報告(高橋健夫先生)

全国調査の結果：2 年前の調査と同様に、約 7 割の医師が緩和的放射線治療を推進すべきと考えているが、依然として院内連携や教育、広報が不十分である。特に 1～2 名の常勤医で運営する施設が約 60%を占め、スタッフ不足が大きな課題となっている。

単回照射(SFR)の普及：痛みを伴う骨転移への単回照射について、実施したことがない、あるいはほとんど行わない施設が 21%存在した。その理由として、診療報酬の低さや「分割照射の方が効果が高い」という古い認識、転院時の入院料減額制度が障壁となっている実態が報告された。

今後の対策：2026 年 6 月を目処に新たな診療ガイドラインの発売を予定している。また、11 月より PEACE プロジェクトの必修項目に緩和的照射が組み込まれたため、他科医師への認知度向上と紹介数の増加が期待される。

提言案：入院料減額制度の緩和や、緩和的放射線治療専用装置の開発支援を提言に盛り込むことが検討された。アクセス面では、片道 1.5 時間程度の距離が通院の目安になるとの意見が出された。

(3) IMRT 提供体制および医学物理業務に関する報告(溝脇尚志先生・大野達也先生)

IMRT を実施できない最大の理由は「常勤医不足(特に 2 名以上の要件)」であり、アンケート回答の 80%以上を占め。また、医学物理士等の技術者不足も要因となっている。施設要件の見直し案として、現行の「常勤 2 名以上」から、「常勤 1 名 + 遠隔支援または非常勤」への緩和が現実的であると提案された。これに対し、2/3 の施設が賛成している一方で、1/3 は「1 人になった際、無理に

継続を迫られることへの不安」から慎重な立場をとっている。11 月の医科点数表の検討(中医協)において、遠隔支援等を活用した IMRT の要件緩和が概ね認められる方向となった。これに関連し、遠隔支援の具体的な働き方(週 1 回の確認など)の調整が進められている。

医学物理士の活用：複雑化する認定資格の整理統合について、関連 8 団体が学会(JASTRO)の下で検討することに合意した。内閣府の原子力委員会でも医学物理士の人材育成が注目されており、評価の向上に向けた追い風となっている。

3. 今後のスケジュールおよび連絡事項

「がん診療提供体制の整備指針」の見直し案、「ジャパニーズ・ブルーブック」の改定案、および本研究班の提言をまとめる作業に入る。提出期限として、共有フォルダー内の指定ファイルに、2026 年 1 月 15 日を目処に第 1 次案を書き込むことが各担当者に依頼された。また次期の厚労科研費の募集が始まっており、本研究班の継続・発展という形で積極的に応募する方針が示された。

以上
文責:大西 洋